

# 照葉樹林だより

てるはの森の会 会報

第9号

2007年11月20日

## 照葉樹林ガイドボランティアの存在

てるはの森の会 会員 八代 佳代子

この原稿を書いている部屋の窓からは、私が31年間慣れ親しんだ照葉樹林とは違う山の風景が見えます。紅葉を始めた木々が目立つようになりました。

結婚を機に宮崎を離れることになった私は、5年間務めた綾の森の保護活動に関する事務局を退き、この11月に広島県へ移り住みました。この地に初めて下り立ち、少し心細い気持ちで車窓から外を眺めた時、私の心をほっと安心させてくれたのは、山や、沿道に見える小さな森の存在でした。知り合いはまだいないけれど、例え小さくても身近に自然があれば寂しくない。宮崎の植生とは違うけれど、ここも同じ地球上の自然としてつながっている、だから私は大丈夫！と感じました。

この気持ちを感じることができるというのは、我ながらとても幸せなことだと思います。綾の森に、心から感謝しています。

5年間の綾の森との関わりの中で、本当に悲喜こもごも、色んなことがありました。前半は、綾の森を取り巻く社会状況も平穏なものではなく、決して楽しいだけの仕事ではありませんでした。しかし、活動に関わる人々と協力し、時には議論を戦わせながら活動を継続してきたことで、現在のプロジェクトの始動へと繋がっていきました。少しずつ、明るい光が見えてきた感じでした。

後半の仕事の中で、特に私の心に深く残ってい

るのが、照葉樹林ガイドボランティアの養成と実践活動のスタートです。綾の森では初めての試みということで、養成プログラムを開発するために自分自身も勉強し、手探りで講座を作り上げていきました。照葉樹林のことだけではなく、生物の教科書を読み直したり、解説に必要なインタープリテーションについて勉強したり・・・知識を提供していくことの責任は重いものですが、真

剣に学ぶ受講生の姿が、より良いものを作りたいと、気持ちを向上させてくれました。講座終了後も、ガイドとして登録した受講生と協力してガイド実践開始への準備を進めました。2006年照葉樹林が最も美しく輝く春、綾の照葉樹林ガイドボランティア第1期生がデビューしました。以降これまで、案内した来訪者の数は640名



に上ります。

市民活動にとって、活動に賛同し、協力してくれる人の存在は何よりも大切なものです。照葉樹林ガイドボランティアという事業は、まさにそのような人々のための「森への入り口」であると思います。多様な人々が、気負わず、楽しく入ってくることで存在として、これからも広く扉を開いていってほしいと思います。

冬には雪が降るこの地から、私はこれからも綾の森の活動を応援していきます。

(旧姓 野崎佳代子・広島県東広島市)

10月8日(体育の日)、前日までの雨も上がり、森ウォッチングのメンバー9人で、綾の森の九州自然歩道の探索に出かけました。長らく土砂崩れのため通行止めになっている区間です。ここを自然歩道として復活させるには、修復するか、迂回路をつくるかといった対応方法を検討するためと、古木、銘木、珍しい植物などを観察するのが目的です。



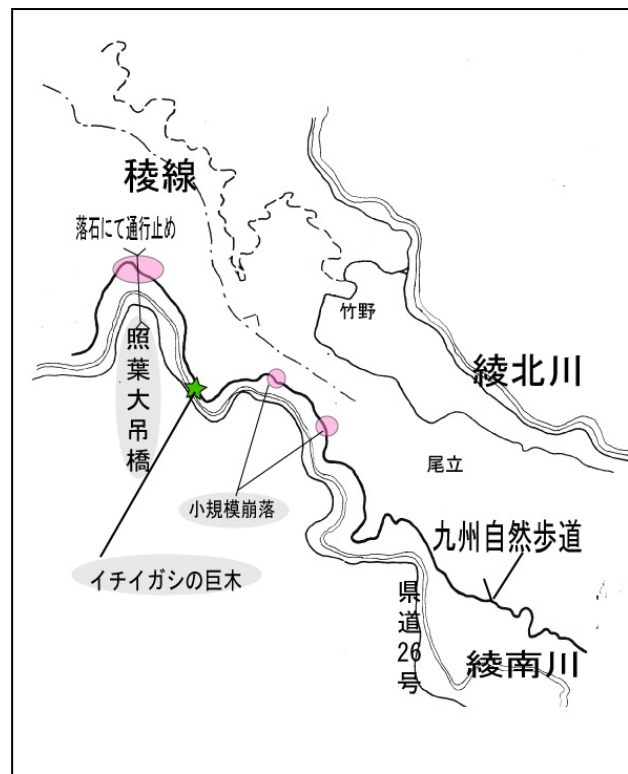
自然歩道探索のメンバー

ほんものセンター駐車場を10時に出発。尾立から20分ほど車で大森林道に入り、そこからは徒歩で進みました。森林インストラクター清藤さんの案内です。登山家3人も同行してくださったので安心でした。

この歩道は、旧トロッコ道なので、軽乗用車が十分通れる道幅があり、高低差のない歩きやすい道でした。木漏れ日の中を樹木の説明を受け、たくさんの野鳥の美しい歌声を楽しく聞きながら歩きました。歩道の石垣には青くコケが生え岩にはイワマツやイワタバコもついていました。



イワマツ



九州自然歩道図

途中、崩落で道が壊れている所が2箇所ありましたが、道の下に石垣にそって迂回すれば大丈夫でした。近くに、ヤマザクラの巨木がありビックリしました。トロッコ道のすぐ横にはイチイガシの巨木もありました。幹周は6.2mもあり、高さはおおよそ35m、樹齢は約400年と見積もられました。樹形がよく、風格もあり、イチイガシ特有の樹皮の様子が美しい巨木でした。すぐ脇には、幹周30cmの若木が数本あり、老樹が枯れても跡を継ぐ木が育っていることを心強く思いました。

イチイガシのすぐ近くには、昔のトロッコ軌道の枕木が朽ち果てていました。大釘が2本打たれていました。打ち捨てられた歴史を感じ、こころなしか寂しくなりました。

さらに進むと、突然道下10m位の木の上のスピーカーから、エーデルワイスなどの音楽が次々に流れて来ました。眼下の川の対岸にある民間の飲食施設を訪れるお客さんに音楽を聞かせるためのスピーカーでした。今まで楽しく歩いてきました

が、ここでは鳥の鳴き声は聞こえなくなりました。自然保護推進員の私は大変気になりました。



イチイガシの巨木

さらに進むと、そこかしこでサカキが根元から1mぐらいのところ、バツサリと切り倒されていました。伐られた先の枝は枯れていました。以前、川中神社の近くでも、トロッコ道の下でも、多くのサカキ、シキミが切り倒され、松の根も盗掘されていました。国定公園内の木を盗み切りして、どこで販売しているのでしょうか。盗品を仕入れて売ると、買う人は盗品を神仏に供えることとなります。こんな事を続けてよいのでしょうか。自然林のサカキやシキミ等が盗まれないように、栽培などを指導するといった対策が必要ではないかと思えます。



大吊橋下の落石

12時に大吊橋下に到着しましたが、ロックネットがあるにもかかわらず落石があり、通行不能になっていました。そこからは川に下りることもできず、50mほど戻って、険しい沢を尾根まで150mぐらいを40分程かけて登ることになりました。途中、マムシが我々を待っていましたが、清藤さんが早業で捕獲しました。一同びっくりぎょうてんでした。

登っている最中に急に雨が降りだしました。山の神の祠の上に出て、「てるは森の驛」に降りて昼食をとりました。

食後の反省会では、次の3点が話題にのぼりました。①九州自然歩道の復旧。「吊橋のパンフレット」は、吊橋の下から橋を見上げた写真です。とても見応えのあるアングルです。せめて橋の下の遊歩道だけでも、一日も早く復旧してほしいと思いました。②サカキ、シキミ、松の根の盗伐盗掘の対策を立てられないか、③歩道の下の木に取り付けたスピーカーから音楽を流すのをやめてほしい、ということでした。

今回は、川中神社下から大吊橋の下までの歩道（旧トロッコ軌道）を探索することになっています。ていねいな森の説明をしてくださる清藤さんに感謝して、3時過ぎに皆さんと別れました。



小規模崩落の様子

(てるはの森の会 会員 宮崎市)

# 綾の照葉樹林プロジェクトの3戦略

てるはの森の会 代表 上野 登

綾の照葉樹林プロジェクトは、群馬県谷川岳連峰の赤谷（あかや）プロジェクトに次ぐ林野庁の第2次の大規模計画として発足した。綾の特徴は、森林管理局、県・町、自然保護協会と民間森林保護団体との協定で計画されたことである。過去2年間、プロジェクトの内容について協議してきたが、2007年度から実施の段階にはいった。その実施は大きく分けて3段階になる。「てるは郷土の森」、森林生態系保護地域の指定、回廊計画委員会の設定の3段階である。それについて私見を述べる。

## 第1段階 「てるは郷土の森」の推進

本プロジェクトの出発は、綾町が核となった「郷土の森」の指定、整備であった。それを踏まえて森林復元計画を検討していった結果、1万haのプロジェクトになった。その調印の後、森林管理局と綾町の「てるは郷土の森」計画が調印され、独自の計画を立ち上げることになった。



てるは郷土の森の情景

それを見越して、「てるはの森の会」は、照葉樹林ガイド養成事業をおこない、吊橋下の渓谷遊歩道ぞいの案内基盤整備を済ませ、「てるは森の驛」も設置し、ガイド事業を実施している。2007年に綾南川周辺が森林セラピーの適格地として指定さ

れ、綾町の積極的な意欲が倍加されてきた。今後の問題は、川中キャンプ場から吊橋までの九州自然歩道(旧森林トロッコ道)の全面補修である。このことによって森林セラピーの目的が達成される。

また、森林学習施設がキャンプ場に設置されることも今後の課題であろう。また、「てるは森の驛」が経営されたが、照葉樹林文化館の利用と結びつけ、県有林の復元計画とも結びついた森林学習拠点が形成されることも期待されている。これらの計画達成によって、吊橋から森林を見て帰るといふ、今までの綾の観光のあり方を、森林を深く理解し、ユツタリと森林浴をしながら、心を癒す観光に転換することが可能になるだろう。

この課題解決のためには、綾の町民の自覚的、主体的な参加が望まれる。中央大学の社会学研究室が、全国の活性化に取りくんでいる自治体の中から綾町を研究対象に選び、貴重な報告書を提出した。その報告書は、町民へのアンケート調査をもとに分析されていた。そして、綾の町民意識の中には、伝統的な立場の違いから町民のなかに亀裂があったが、その立場の違いを乗り越えていこうという意見が芽生えてきていると結論している。中央大学の学生たちは純真な気持ちでアンケート調査を行い、綾の町民の心の底にある本音を探りだしたのではないかと、感心して読ませてもらった。

「綾の自然と文化を考える会」は、照葉樹林文化シンポジウムが郷田町長辞任後に途絶えていたことを反省し、シンポジウムを復活させ、活動を開始した。その後、また少し停滞しているが、いま町民と一体となった「森と綾の結びつき意識」を育てようという気持ちになってきている。前田町長も、森林セラピーを足がかりにそうした町民と

の提携を真剣に考えだしている。役場と町民が一体となった「てるは郷土の森」計画が、町民の前に明らかにされる時にきている。

## 第2段階 「森林生態系保護地域」指定に向けて

「てるは郷土の森」の北側の稜線をこえると、綾北川の斜面に沿う大森岳への林分には原生的林相が残っている。その林分を森林生態系保護地域に指定できないかという提案が、「てるはの森の会」と日本自然保護協会から提起された。

九州森林管理局は、森林生態系保護地域指定に対する林野庁の規定を検討した結果、指定の方向で調査委員会を立ち上げることになった。8月に第1回委員会が開催され、面積1167haのうち、674haをコア（核）地域、残りをバッファー（緩衝）地域にするという原案が提起された。これに対し、貴重な林相が緩衝地域下の谷側に存在すること、また大森岳と掃部岳の植物群落保護林を飛び地として含められないか、などの意見がだされ、次回の課題にされた。

この保護地域候補地は、大森岳林道に接する地域であるが、一般の人は踏み込むことが難しい本当の原生に近い森林部分である。林道からの観察場所が整備されれば、照葉樹林の姿を観察することができると思われる。モミやツガの針葉樹が混在していて、照葉樹林の垂直的な林相も理解できる。森林生態系保護地域は全国でも28カ所で、綾が指定されれば評価はぐんと上がり、世界自然遺産候補地としての価値も高まる。

## 第3段階 「緑の回廊」計画委員会の設立

綾北川の支流の曾見川は、掃部岳から流出しているが、そこには北浦林道が設置され、人工林化が進められてきた。その人工林を自然林に復元し、大森岳と掃部岳を結ぶ照葉樹林回廊を実現するのが第3段階の目標である。幸い、国有林の人工林は、稜線に自然林を残して造成されてきたので、蜘蛛の巣状の自然林に囲まれたように人工林が配置されている。間伐の方法を考えれば、その稜線

の森からの種子の供給による自然回復力で自然林を復元できる。そのことを考えて、自然林を残していたのである。



綾森林生態系保護地域予定図

「緑の回廊」は、青森営林局が奥羽山脈に沿い400kmにわたる回廊を設定したことに始まる。多くは東日本に設定され、西日本には少ない。国有林の団地が少ないことが一因であろう。綾のプロジェクトは、この林分の復元によって西日本最大の「緑の回廊」をつくることになる。これを契機に、尾鈴山から猪八重溪谷までの残存照葉樹林を繋げば世界最大の回廊も夢ではなくなる。今でも大森岳林道から掃部岳を展望すると、累々とした山並みの景観に感心する。吊橋からの景観印象とは違った印象の景色である。

平成19年度から、管理局は曾見川の源流域の稜線に近い緩傾斜面から、当局の主導による間伐方式で復元事業を行うことになった。5月に照葉樹林研究フォーラムが開かれた時、科学的な復元状況調査の報告があった。これに対し、民間の業者からは、木枯らし技術による復元の考え方が提起されてきた。伐採方式だけでなく、いろいろの復元技術があり、この検討が研究課題として浮上してきた。第3段階は、復元方式の新しい技術の開発の可能性も秘めている。

(宮崎大学名誉教授・宮崎市)

# 綾の森の沢調査 ①

<ことの始まり>

綾の沢調査担当 林 裕美子

沢の知識も、道具も、何もないという状態でのスタートでした。考えていたのは、「照葉樹林とスギ・ヒノキの人工林の生き物が違うかどうかを調べたい」ということでした。最初は、それぞれの森の土壤動物の種類を比べてみることを考えていました。違いがあるだろうことは想像できたのですが、どのように調べたらよいかわかりません。当時仕事でお世話になっていた名古屋女子大の村上哲生先生に相談しました。川の生態学の研究者でした。水生昆虫で比べてみないかと言われました。調査道具も貸してくださるとおっしゃいます。一大決心をして、お願いすることにし、森の沢の調査を始めることになりました。2005年の5月でした。調査というのは地味な活動ですが、面白さを知ってもらうきっかけの機会です。森を歩く仲間や昆虫に興味がある仲間にも声をかけたところ、たくさんの方が参加して下さることになりました。



2006年6月18日調査参加メンバー

まずは、調査地を決めました。綾北川とその支流の曾見川、綾南川とその支流の多古羅川、これら4本の川に注ぐ沢の流量を測って歩きました。そして、川中神社のところの照葉樹林の沢と、その対

岸のスギ・ヒノキの人工林の沢で毎月調査をすることにしました。自動温度記録計を設置し、沢の幅と深さと流れの速さを測って流量を計算し、水棲昆虫は集めて持ち帰って名前を図鑑で調べました。

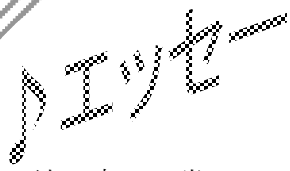


流量測定：沢の幅と深さを測定する

調査を始めて間もない2005年9月に、大きな台風がやってきて、大事な温度計が流されるというハプニングがありました。道路が通行止めになったこともあって、沢調査もこれで終わりかと、一人めげていたら、村上先生が温度計を追加で貸して下さることになり、いつも一緒に行っていた仲間からは、県道の通行止めが解除になったと何人もの方から連絡が入りました。2ヶ月のブランクができてしまいましたが、2005年11月に再スタートし、それ以来、連続してデータがとれています。

今年になって約2年分のデータをまとめ、照葉樹自然林と針葉樹人工林の沢では、流量や水棲昆虫が違うことが少しわかってきました。調べれば調べるほど、わからないことが出てくることも知りました。誌面の関係で、少しずつ連載でご紹介していきたいと思います。

(てるはの森の会 会員 宮崎市)



## 先人の意思が伝わる森の道

坂元守雄

綾の森には幾つかの道があります。綾南川沿いの宮崎一須木線、綾北川沿いの田代八重一綾線をはじめ、私たちが森の中で親しんでいる遊歩道やかつてのトロッコ道があります。それに、今では使用されない川中神社の旧参道があり、大森岳の尾根の道があります。いずれも、先人が時代の要請によって、あるいは、森との関わりの中でつくったものと考えられます。

田代八重一綾線は、綾北線の軌道を昭和34年(1959)に県道として自動車道に改修したものです。宮崎一須木線は、昭和51年(1976)に県道として開通していますが、記録によれば明治の半ばから計画された道路といえますから、その開設には大きな期待と労苦があったことがうかがわれます。

昭和34年に県道として自動車道に改修された綾北線の軌道(いわゆるトロッコ道)は、大正9年(1920)に着手され、綾から田代八重までの約3.1kmが昭和16年(1941)に開通しています。この軌道は薪炭や木材の運搬を目的にしたものでした。とくに綾北線の場合、秘境といわれた峻険な地形での工事ゆえに、長期にわたる軌道の開設には、先人たちがどれほどの心血を注いだか想像することさえできません。

綾南川左岸の軌道は、綾の中心部から多古羅までを昭和4年(1929)に着手し、昭和29年(1954)に延長3.0kmが完成しています。これも薪炭や木材の運搬に重用された軌道です。その後、宮崎一須木線の開通によって廃止されました。この軌道跡の一部は昭和56年(1981)に開通した九州自然歩道として活用され、とくに川中から照葉大吊橋までの歩道は優れた自然観察道として親しまれていました。現在は土砂崩落のため不通になっています。

川中神社の旧参道は、尾立から川中まで、大森岳南東稜の中腹、現在の九州自然歩道の上部にほぼ平行に通じ、現在も辿ることができます。綾南線の軌道が開通するまでは唯一の川中神社の参道でした。この参道を人々が参詣したのはいつ頃からのことでしょうか。神社誌には川中神社の創立年は不詳とあり、「境内にあった金峯山川中嶽西光寺は養老2年(718)の開基と伝えられ」との記述もあります。

綾郷土誌に明治39年(1906)の綾村図が掲載されていて、それには道が綾の中心部から錦原、爰野を経て、大森岳の尾根筋と見られるところを須木村へ通じているのが描かれています。尾根道は古くから街道や往還道に利用されてきたように、この尾根道も須木村や西諸県郡への往還道であり、古来、人馬が行き交った歴史的な道であったことがうかがわれます。

森の中に残る道は時代の変遷を映し、先人の意思や辛苦を刻んでいるように見えます。これらの遺産をどのように生かしていくかは私たちに与えられた重要な課題だと思いますが、そのことについては、次の機会に譲ります。

(てるはの森の会 会員・宮崎市)

# 事務局から

## 「綾の照葉樹林プロジェクト」の動き

### ■ 綾森林生態系保護地域設定委員会開催

(2007年8月28日・10月31日)

森林生態系保護地域の指定に向けて、2回の委員会が開かれました。この委員会で「綾森林生態系保護地域計画案」が承認され、森林管理局に答申されました。

綾の照葉樹林プロジェクトエリアの中核となる最も原始的な植生の残る1167ヘクタールが森林生態系保護地域に設定されます。「保護地域」のうち674ヘクタールは「保存地区」に、その周辺の493ヘクタールは「保全利用地区」となります。これによって、国が定める最も厳格な基準で、原則的に自然のまま森林生態系が維持されることとなります。

### ■ 綾の照葉樹林プロジェクト報告会の開催

(2007年12月14日)

「綾の照葉樹林プロジェクト～これまでの成果と今後の取組」と題して、5者による報告会が開催されます。「綾照葉樹林の魅力」と題して、河野耕三先生による特別講演も行なわれます。

時 12月14日 19:30~21:00

場所 綾町高齢者研修センター

## 「てるはの森の会」の動き

### ■ 綾の森九州自然歩道探索

(2007年10月8日)

綾の森の九州自然歩道の調査に出かけました。途中2カ所で小規模崩落がありましたが、迂回しながら進み、綾照葉大吊橋が見えてきたところで、大量の落石で通行不能となってしまいました。途中で雨も降り始め、大変な調査となりました。

### ■ “九州環境 NPO 大賞” 受賞

(2007年10月18日)

北九州市で開催された「エコテクノ2007・九州地域環境NPO事業評価プレゼンテーション」に参加しました。九州内から9つのNPOが環境の取り組みのプレゼンテーションを行い、「てるはの森の会」構成メンバーであるNPO法人宮崎文化本舗が、綾の照葉樹林プロジェクトの取り組みについて発表し、“九州環境 NPO 大賞”を受賞しました。



### ■ 事務局より

1. 会の発足より事務局の仕事がされていた野崎佳代子さんが8月末で、結婚退職されました。9月より、相馬美佐子が後を引き継ぎました。いろいろ教えていただきながら頑張りますので、どうぞよろしくをお願いします。

2. この会報は従来、綾の森を世界遺産にする会の会報として発行してきましたが、本9号からてるはの森の会の会報として発行することになりました。

## 会員募集中!

「てるはの森の会」では、綾の照葉樹林プロジェクトにご協力いただける会員を募集しております。

年会費	個人サポート会員	2000円
	家族サポート会員	3000円
	団体サポート会員	5000円
	法人サポート会員	10000円

会員になっていただくと、照葉樹林やプロジェクトに関する情報を掲載した「照葉樹林だより」を年4回お届けします。プロジェクトが実施するイベントや各種行事に参加できます。

詳細は下記事務局までお気軽にお問合せください。

てるはの森の会 会報
第9号 2007年11月20日
発行：てるはの森の会
〒880-0014 宮崎県宮崎市鶴島2丁目9-6 みやざき
NPO ハウス 403号
TEL 0985-35-7288 / FAX0985-35-7289
E-mail: teruha@miyazaki-catv.ne.jp
URL: http://www.teruhanomori.com

(表紙の写真「大森岳南東稜と秋空」 撮影 坂元守雄)

協賛企業

